

様式(7)

報告番号	甲 保 第 27 号 乙 保
論文内容要旨	
氏名	小林 秋 恵
題目	Factors associated with changes over time in medication-taking behavior up to 12months after initial mild cerebral infarction onset (初発軽症脳梗塞患者における発症12ヶ月後までの服薬行動の経時的変化と関連要因)
<p>背景・目的：脳梗塞の再発率は、発症後1年以内10%、5年以内30%、10年以内50%と高く、再発のたびに患者のQOLは著しく低下する。そのため脳卒中治療ガイドラインにおいて危険因子の管理と抗血栓薬の服用が推奨されている。しかし、患者の薬物療法に対する効果や出血傾向という副作用発症の理解不足のため、継続して服薬を続けることを困難にしている。一方、医療者側の問題として、厳密な原因疾患の管理と内服管理が再発予防に重要であることの説明・指導が不十分と言われている。脳梗塞患者を対象とした服薬行動に関連した研究では、慢性期の横断的研究があるのみで、脳梗塞発症患者の服薬行動の変化に着目した研究はない。そこで、服薬に関連した脳梗塞再発予防教育の示唆を得るために、初発軽症脳梗塞患者の発症から12ヶ月後までの服薬行動の経時的変化とその関連要因を明らかにすることである。</p> <p>方法：初発軽症脳梗塞患者に対し、入院中、発症3ヶ月後、6ヶ月後、12ヶ月後の計4時点の調査をした。入院中は面接による聞き取り調査と自記式質問紙調査を行い、発症3ヶ月後、6ヶ月後および12ヶ月後は電話による聞き取りと郵送による自記式質問紙の回答でデータ収集を行った。調査項目は、服薬遵守、服薬の認識、行動コントロール感、危険因子の生活習慣、主観的規範についてであった。服薬行動の経時的変化の検討には、4時点の服薬遵守および服薬の認識の各項目と合計得点のFriedman検定を行った。服薬行動の経時的変化の類似性をもとに対象者を分類し、その特徴を明らかにするために、クラスター分析を行い、有意水準は5%未満とした。本研究は、研究者所属機関の研究倫理審査委員会および研究対象者が通う病院倫理審査委員会の承認を得て行った。</p> <p>結果：脳梗塞発症後の入院中に初回のデータ収集ができた51名のうち、発症12ヶ月後まで4時点の継続したデータ収集を行うことができた31名(60.8%)を分析対象者とした。男性が22名(71.0%)、年齢66.0±8.4歳、就業している者は15名(48.4%)であった。脳梗塞の病型はラクナ梗塞が最も多く19名(61.3%)で、30名(96.8%)に脳梗塞急性期治療の抗血小板療法、抗凝固療法が行われており、入院期間は16.2±5.8日であった。服薬遵守は入院中に比べ経時的に良好となったが、服薬の認識の経時的変化は認められなかった。服薬遵守の経時的変化に基づくクラスター分析で、服薬遵守「高値維持群」と「低値維持群」の2群を認めた。入院時の服薬遵守「高値維持群」は「低値維持群」に比べ、行動コントロール感は偶然や運命の影響を受けると認識していた。</p> <p>考察：初発脳梗塞患者に対して、再発予防のための抗血栓薬は、一生涯服薬を継続しかつ再発症を防ぐことが目的である。この薬効の意味を十分に理解し服薬遵守の行動が継続できるように支援する必要がある。入院中に服薬遵守に関する現状と行動特性のアセスメントすることで、12か月間の服薬遵守高値継続群と低値維持群の患者の認知・行動特性の特徴を明らかにできた。2群の認知・行動特性の特徴に応じて、12か月を通して抗血栓薬の内服が継続できるよう看護職が細やかな再発予防の支援をする必要性が示唆された。</p>	